



石門

心學子道

三篇下

9  
3895  
9



門口 9  
號 3895  
卷 9

心學道之詰二編卷之下

孔子曰博學之  
審問之慎思之  
明辨之篤行之

聰明睿智守之以愚と云ふりまふりある  
は世の中が此處に中うふん持ふ方の只に己を克て  
と云ふは仕業に任て居るよあつて玉と雖も此處と同ト  
るでたのまが松欵や身傍にするんはたそりへるま  
ちのとも氣が附ずたに向ふたりたそれて逐るもの  
が幾本もあるものよと云ふと回念に女中かぞゐるていふ  
て見るに何ぞ死見ても出るう豈居ん物も性といふ  
と千五百後者此群を夜裳にも負ぬ事なつてうは法  
法後の報の替や瑠璃の椽筭と亭を隠して天を拈

心學道詰 卷下

三編

早稲田 大學 圖書館  
昭和 7.6.16 受  
藏 書

へり。つらつらも、せいで揚子かよのど身み又また思おもうと、あつた文ぶん路ろとハ  
 文ぶん字じふんふんがあるあると、かゞら何なにとれそ、あつた思おもうと、思おもへハ、あつた自じ然ぜん見みま、  
 里さとのあつた後ご人にんへとも出で會あひあはよ、あつたのあつた見み終しゆうめらまま子こババよ、あつたのあつたガ  
 のとそれ、あつたらうあつた小こ幸さいと、あつたんであつた肝かん骨ぼつおおれおるる、あつたふふのあつたハハ家け  
あつた天てん憲けん又また揚やう子しりり身み又また臺たいてて居ゐると、あつたいい中ちゆうググととややししてもも合あは  
あつたがあつたゆあつたうあつたぬあつた能あつた候あつたふあつたととのあつたドあつたやあつた又あつた丁あつた雜あつたのあつた長あつた吉あつたハあつたれあつたのあつたまあつたのあつた買あつたひ  
あつた又あつた店あつた乃あつた錢あつた策あつたさあつたがあつたかあつたがあつたらあつた裏あつた乃あつた眼あつたとあつたれあつたそれあつたらあつたうあつた代あつた  
あつたのあつた三あつた助あつたハあつた女あつた中あつたハあつた屬あつた小あつた偷あつた眼あつたつあつたうあつたハあつたはあつたああつたがあつたらあつた且あつた於あつたああつたやあつたかあつたま  
あつたさんあつたとあつたれあつたそれあつたらあつたうあつた。そんなあつたかあつたおあつたれあつたまあつた後あつた者あつたもあつたああつたるあつたとあつたのあつたドあつたやあつたがあつた何  
あつたとはあつたああつたぬあつたまあつたのあつたいあつたやあつたなあつたらあつた恰あつたとあつた盜あつた賊あつたがあつた人あつた乃あつた物あつたとあつたぬあつたすあつた

あつたくあつたはあつた公あつた儀あつたのあつた所あつた成あつた敗あつたとあつたれあつたそれあつたらあつたうあつた揚あつた子あつたがあつた。むあつたらあつたうあつたも  
あつたくあつた人あつた代あつた乃あつたらあつた船あつたやあつた人あつたはあつた皮あつた耳あつたとあつたれあつたとあつたるあつたとあつた同あつたドあつた中あつたであつた。そあつた非  
あつたああつたハあつた氣あつたのあつた侍あつた者あつたトあつたやあつたとあつたぞあつたおあつたんあつた知あつたてあつた世あつた界あつた中あつたはあつたねあつたそ  
あつたるあつたよあつたまあつたのあつた夫あつた上あつたハあつたとあつたぞあつた我あつたんあつたとあつたのあつたああつた中あつたとあつた。ああつたつあつたらあつたうあつたとあつた受あつた宣あつた  
あつたしあつたふあつたまあつたのあつたであつた。ああつたぞあつたりあつたまあつたすあつた。それあつたはあつた又あつた人あつた代あつた乃あつたらあつたうあつたふあつたらあつたいあつた  
あつたやあつたがあつた金あつた銀あつたとあつたのあつたさあつたもあつたああつたれあつたそあつたらあつたうあつたのあつたまあつたのあつたドあつたやあつた何あつた所あつたのあつた何あつたもあつた傷  
あつたハあつた。ああつたつあつたたあつた又あつた年あつたとあつたもあつたもあつたまあつたのあつたいあつたやあつた酒あつたとあつたのあつたああつたもあつたのあつたハあつた怖あつたいあつたまあつたの  
あつたもあつた。ああつたつあつたたあつたはあつた論あつたもあつた怪あつたああつたああつたやあつたまあつたらあつたもあつたえあつたらあつた。ハあつた酒あつたらあつたうあつたああつたるあつた  
あつたのあつたどあつたのあつたいあつたまあつたすあつたらあつたむあつたうあつたらあつたうあつたらあつた金あつたをあつたああつたがあつた人あつたとあつた切あつたああつたのあつた手あつたをあつたああつたれあつたが  
あつた首あつた領あつたこのあつたどあつたのあつたうあつたらあつた半あつたもあつたああつたぬあつたがあつた酒あつた樽あつたがあつた酔あつた酔あつたのあつた酒あつた徳あつた









くる中より終するまでの中とならぬものでござります。そ  
 して此類回このくんぐわいがあるね。何なんが。あつこと足たりて回くわい雖た不ふ敏みん  
 請事こうじ新語しんごと法ほう結けつとせしきまのこころいふ  
 りなまは私わが不敏ふみんか。よのでいふござります。此こ法ほう結けつ  
 だけあるものと生い履りふの仕しゆじゆは致ちしませど。しつう  
 と法ほう念ねんをましこころでござります。が何なんとああららぬ  
 ぐじやござります。せぬ。とぞ法ほう互ごは此類回このくんぐわいの法ほう  
 たりともはるよので。ござります。まましこころで。愛あいあり  
 ぐふ話わが。おさりまましこころ先年せんねん当舍とうしゃの周しう徳とく中ちゆう決けつ二に  
 翁おうの存ぞん生せい代だい時じ半はん込こままり。位たいで長ちやうくくままのここ花はな村むら

何なん事じとれ中ちゆうにに至しり。篤とく實じつか。化けで法ほう法ほうの平へい  
 堂だう。ものも夢ゆめ言ごんふ。得えししぬ。ぬぬ中ちゆうか。んんで法ほう法ほうの平へい  
 けけかかがが法ほう法ほうとと殊しゆの介けい位い作さくししされされ万まん中ちゆう妙めう妙めうの平へい  
 あつこと中ちゆうより。ああららぬ。まましこころああららぬ。ああららぬ。ああららぬ。  
 兄弟あにいむももななららぬ。まましこころ二に翁おうとと師しもも親おやもも兄あにいむ弟ていもも  
 とと法ほう法ほうの平へいのああつつても。まましこころ法ほう法ほうとと道だう二に翁おう（ああららぬ）  
 なる。翁おうの私わが人ひとと結けつととううで。まましこころややりりとと同どうくく勤きんととれ  
 るるのでああつつたたげげ法ほう法ほうの平へいのああららぬ。まましこころ法ほう法ほうとと道だう二に翁おう（ああららぬ）  
 おおささりりまましこころ聖せい人にんもも事こと二に族しゆくして。言ことと結けつとと有あ道だう二に翁おう（ああららぬ）  
 西さいとと学がくとと好このむむと。まましこころ法ほう法ほうの平へいのああららぬ。まましこころ法ほう法ほうとと道だう二に翁おう（ああららぬ）



初。あつゝふるでまざりませ相そ。や内儀子娘二人  
 持て居られさふつなく痛付きて終る。すはみ文で  
 終る。まありさげあふ。病中。又桑内。の。應。い。を。好。す。は  
 承けらひ。此病。は。佳。氣。の。ほ。ども。是。来。ふ。一。き。取。ら。せ。ま  
 遂。二。世。生。の。報。し。ふ。よ。ん。を。得。乃。及。つ。り。る。は。あ。げ  
 まで。是。まで。一。生。と。安。事。な。れ。つ。り。る。は。あ。り。が。こ。こ。そ。あ  
 う。へ。生。死。の。原。も。難。い。か。ら。色。バ。仙。一。つ。り。り。も。事。も  
 な。り。と。し。ひ。ふ。又。生。死。の。原。を。生。ひ。の。事。及。び。是。道。二。生  
 生。の。法。恩。なり。され。ば。我。死。亡。後。に。及。二。世。生。と。師。とも  
 親。とも。此。方。とも。思。ひ。存。中。治。方。の。事。及。び。此。世。の。法

中。此。道。引。未。な。り。か。ぎ。り。て。道。二。世。生。へ。法。法。中。の。げ  
 先生。の。指。圖。乃。と。つ。り。て。終。され。よ。か。る。は。く。自。己。の。考。と  
 を。以。て。万。物。と。死。を。う。ら。ふ。事。用。なり。と。選。云。し。を。終。る  
 ま。し。く。し。あ。そ。こ。で。そ。の。桑。内。乃。原。も。す。選。云。の。通。り。と。終。く  
 中。の。二。世。生。の。事。子。も。出。来。あ。ら。ぬ。お。続。も。あ。つ。く。や。と  
 して。終。る。う。ら。妹。娘。も。お。ひ。く。終。ま。か。仲。る。と。も。その  
 娘。も。生。死。も。十。人。無。で。何。一。も。さ。ん。も。な。ら。ぬ。娘。な。れ。ど。中  
 と。生。れ。合。中。の。縁。事。よ。て。と。あ。つ。く。世。に。あ。り。ま。で。縁。付。も  
 ち。う。り。の。事。中。う。く。二。年。七。身。の。年。さ。る。方。より。わ。ら。ひ。と  
 う。け。ら。も。と。前。の。先。方。ハ。す。い。ぶ。人。相。合。も。よ。内。る。れ。ど

娘もあつ小舅小姑もあつまうへ継子た二人もある  
 内なれば嫁ふしてもまあお嫁は六つ以内なれどそこが  
 強とつものりかぬ母親のいふくま成へつて娘なれば五  
 花嫁ともおれまうらお金も遣ふと事いふ事いふ事いふ  
 仕うらうらやと内梅れお嫁もあつまうへ梅れゆへ先共も  
 及二先生は法相様中さんと母親は娘とつきて中身は嫁へ  
 系くも叔母親はこれまうへ是なる娘も世及何町何  
 某夜より苦いどうけらまうへ先方へう中うく乃  
 内ゆへあつら金むけ方角でもあつらませぬが案へけ  
 娘れるゆへ何ゆも周縁とあつらあつらませぬとてさうさ

存しませぬが是いつて致しませぬといをれすこれ先生  
 のいをれまうへまをすの孫をふりておどる志り小舅  
 姑もあつ小舅小姑もあつまうへ継子た三人もあつと  
 つて世に垂せの時いふと六つ以内の中うあまどいやあま  
 さうさこのでも法さぬそこへ娘はのんツで暮もるれば  
 あくもなるまのゆへ家には中りあさるもうらうらふがまう  
 何いともあま娘法の内ゆへ大率でおどるが娘法はああま  
 ん得て仕やと思つらうと聞きまうこれ娘はちと西をあが  
 る子と突てたつとくしがんゆへとて是今ゆもかうと中  
 考もあつらませぬがまうへ先方へあつらまうへたう小舅姑

法をすのぞん大切ひいてすて。なりしけ孝婦と登しま  
 せふし又小舅小姑のぞん信実ともの謝合あり三  
 人の継子とバ十分可きつて若婦りと布されしとバ  
 道二孫娘の親とどつと衣服でそれハものくの升乃ん傳  
 でおざるを中うふん得でハとても世縁も長久ハ仕ませぬ  
 う。あまお袋あゝの縁談も。まあ止させしもいふと。いな  
 きまのしげふ。そこで母も娘も後とつや。さやうなる  
 ぶふん得て。まのりますか宮うおざるますゆと中これハ  
 孫の又のそれますいひてますハ中すのゆなれど。そも娘  
 後の一生乃身は為るよなる一大事ハ義トやよふと。つひ一

と少りまのそはけるで申しるよの合ぬう。まあとくと考  
 へて忍ももぐよの津袋もともぐも考へてとて考へれ  
 そのうでいよく親との小変宜が出来さう。又重て  
 相談は法まであさきと。いなやゆへと申うるハゆり  
 申してゆりかんりま。さう。又うりひはよりませふとを  
 日、まづゆりま。さひかちそれう。二三日して又母子  
 連して先生ハ終へるも叔母親のいをねます。此も中  
 上ありと娘が心得う。いな。さう。さう。なると修せられ  
 ま。さう。減ほども終がど申う。海をま。さう。なると  
 娘もやあひゆ。又今日つきてよりま。さう。さう。なると

お姿をさされては申りおされて下さりませ。おま娘をさるこ  
 け考へて一息中上げて見ませと。口をきかしてこれ娘も  
 又とついでつらとぬき中上まゝ一かうは舅姑清一考  
 りどつてませよの小舅小姑に海切とそしませよ此又  
 三人は子供を可きうで申りませよのと申りて。どよ  
 申りおのころよまゝと隔がある申りておまもよの申り  
 よんごまなよ波はと申りままへまゐりとおどまらん  
 それで海方操が悪ふとおおせらまゝのでおどらませよ  
 うとおあも。うとんと申り合ませ。それでどらら。さ申り  
 ちる管もさるわりと持申りて只舅姑清一私に信実の

とく操うさぬとやとぞんと申りて。よらうおどらませよ  
 り又小舅小姑に私づ実の兄弟とやと思ひませ。二人の継  
 子も継子と思ひませ私づ身取中おつと信実の子とや  
 と思ひませよ。さ申りて。いづとておどらませよと  
 申りませ。いづと道二お大と小思や。それハ又言語を  
 改ち。さる管で清なる女は身とて申り申りお利はよ  
 子管持て居る色で。何と嫁入せませても尻の居る約ハ  
 清さぬ。おや此おれん得より又一版日なふたんと舅姑  
 清と信実の親と思ふれ。や小舅小姑と実の兄弟と。おも  
 ほよの又三人は孩子とお産ご実の子とやと思ひませよ

のと。そりやも。南産の出来合子曾で。づき末のと。ぐろ  
 ぬるトや。これ法袋ど。でも此縁腹止。よせ。る。ぐよ  
 婚法むすめどの。おれ心得。いづき長久。を仕ませぬ。こと。い。それま  
 ー。これ親子とも。膽こころと。つ。志。を。く。を。集。も。ま。ざ。ら。お  
 ん。ざ。げ。ま。り。稍。あ。つ。て。泪。と。お。ぐ。ね。も。く。は。法。切。あ。り。難。ふ  
 ぞ。ん。ド。ま。ぬ。志。あ。ー。お。ぐ。ら。せ。う。い。と。も。我。と。が。考。へ。お。ま  
 及び。ま。せ。ぬ。ふ。ま。き。づ。只。幾。重。よ。も。法。志。あ。ー。と。難。い。上。ま。ぬ。と  
 中。され。れば。道。二。難。ま。こと。笑。ひ。お。ぐ。ら。それ。い。な。お。る。で。お  
 ざる。さ。い。づ。ま。ん。坊。々。と。今。志。あ。ー。て。ま。せ。ま。せ。よ。あ。ま。始。は。ら  
 う。あ。て。と。と。ま。い。れ。ね。ね。ま。あ。そ。な。な。い。と。る。と。一。と。や。り

ま。と。ま。い。ず。い。お。ん。な。お。り。な。れ。ど。そ。り。や。も。世。留。る。と。あり  
 べ。ぐ。つ。の。知。ま。こ。う。曾。也。今。友。の。よ。め。入。れ。る。よ。い。合。ぬ。そ。ま  
 也。等。と。あ。の。中。う。よ。ま。び。く。い。ぞ。上。ま。ま。せ。この。ト。や。併。ま。あ  
 あれ。何。ど。ふ。も。終。ん。ぐ。と。附。く。ま。こ。ま。ぞ。ん。い。感。ん。い。ん。に  
 ね。その。外。よ。一。大。中。れ。是。終。と。い。ふ。別。の。ゆ。で。も。法。ざ。ぬ  
 只。堪。忍。と。い。ふ。ゆ。で。お。ざる。此。な。り。の。家。よ。め。入。せ。ら。る。と。お  
 只。堪。忍。れ。ぬ。と。判。然。と。い。ゆ。の。ト。や。と。覚。悟。せ。ら。る。が。よ。い。そ  
 神。を。と。ら。る。も。を。年。で。七。七。年。祝。の。家。風。よ。別。海。と。娘。係。よ  
 他人。の。家。一。運。入。ば。ん。よ。合。ぬ。事。も。お。や。く。悲。へ。る。い。あ。ら。ち  
 た。ま。い。づ。き。長。久。月。日。よ。湯。屋。の。隅。や。雪。後。の。壁。へ。向。く



げぶらや角又ハ小舅も小姑も皆それくハ縁附被され  
 おかりだ縁切よく合と又三人の子供ハ皆それくハ  
 成長つとそれく也(惣領ハ小娘と要ふれ子次ハ他家ハ  
 書子ハ中とともあまに嫁入せりともも涉ざりませ  
 げぶらとともく孝女ハ母に母法を継の外大切よ  
 してこれ家も中しく懲昌つて中女(後ハ母法を  
 其乃宗現存なるつて箇舎ハもたす出席してこれ  
 一生道だたのんで居るまきくげぶら何とありら  
 ち縁ト也法よりませぬらたつて二ツは堪忍と有りら  
 らまじ徳でり中ハ安宗お著しら如來まじく佛はま

安宗那寂光傳(ト)いふがやのむりせめてあざりませぬ  
 子母法が自身は善い時に通る道ハ母の縁切おまめ  
 して徳を指さきこと中めであざりませぬが實ハ是れ  
 ありと云ふまめと法よりませぬ其の即縁とともれも縁  
 での克己復礼といふもので中むりたて居る人氏乃で  
 法よりませぬも動活法せよハ善いしね縁とともも  
 ひとまむりりまくなつて子母の不仁中風病も同じ  
 むゆ一層が皆輕物なるハは舞とらやを清く真よと志  
 して勵まして中うまなりのふものであざりませぬとて

あやうり本屋でさうぞう抄は延屋あまも古徳あまも  
ふ又うらうのしは出席  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて  
心學道之語三篇をさうぞう抄に抄りて

弘化二年し己秋刻成 廣陵 花蹊堂

心學道の話四篇五篇 追刻

京都錦小路駄屋町東江入

伏見屋祐七郎

江戸日本橋南壹町目

須原屋茂兵衛

大阪農人橋通谷町西江入

本 屋吉兵衛

藝州廣島中島本町

世並屋伊兵衛

書肆



